

の考えの方が現実的で、大都市内部の大規模な住宅団地に田園都市の理念を生かそうとするものである。ニューヨークのイーストリバーのルーズベルト島に建設中のニュータウンは、今後の大都市整備の中に田園都市の理念を生かしてゆくひとつの事例として注目してよいであろう。

都市内部地域の整備に関しても、従来のような大規模な再開発でなく、既存の街の個性をなすべ

く生かす形で、住民が定着できる町づくりをめざす修復“(リハビリテーション)”が主流になろうとしている。イギリスの都市では、住民を主人公にした新しい町づくりがより強化されようとしていると見てよいであろう。

British Towns—the status quo—

Noboru INOUCHI

ヨーロッパの旅

金子晶子

1980年夏、高校地理教師を対象とする世界地理研究会主催の中国ヨーロッパの旅に参加した。コースは北京からイスタンブール、ミラノを経てスイス、東西ドイツ、ノルウェー、フランスと延べ13国、毎日が課題つきの超過密の23日の旅であった。この中から次の3点を中心にスライドを編集してみた。

イスタンブール

ボスポラス海峡をはさんで広がる活気に満ちた国際的商業都市、モスクと尖塔が聳え、コーランの響きが聞こえるイスラムの街で、トプカプ宮殿、ブルーモスクがオスマン帝国の栄華を物語るのに対し、長くイスラム寺院とされていた聖ソフィア寺院では近年漆喰の下から壁面一杯にキリストのモザイク画が現れ、1453年オスマンに滅ぼされる迄の東ローマ帝国千年の歴史が息づいている。目抜き通りをまたぐ水道橋、城壁にも1600年にわたり首都として君臨した街の風格がある。現在はボスポラス橋の完成で小アジアと陸続きになり果樹地帯には工場が進出し、広場にはトルコの父アタチュルクの像が立ち、新しい国造りがめざましい。アジアとヨーロッパ、イスラムとキリスト教、長い歴史と現在が融合し混沌とした魅力をもつ街であった。

スイス・ノルウェーの氷河

シンプロン峠越えで入ったアルプスではツェル

マットから快晴のもと3130mのゴルナグラートに上る。眼の前には最高峰のモンテローザをはじめブライトホルン、マッターホルンとパリスアルプスの雄大な360度のパノラマが展開しカール、氷河、モレーンと氷河地形のテキストでもみるようだ。急壁を下り眼下のゴルナグラート氷河(14.1km)上に立つ。羊背岩、モレーンが迫りクレバスから覗きこんだ碧氷の色が印象的だった。氷食谷上の段丘や崖錐、懸谷に喜び、U字谷をロースの源流に上る。絶壁にロース氷河の末端が垂れ下り圧巻、反対側にはラインの源流とフルカ峠付近が分水嶺である。

ノルウェーではオスロからスカンジナビア山脈を鉄道最高点フィンセ駅(1222m)で越え、ベルゲンにむかう。車窓に展開する針葉樹林と氷河湖、氷河もスイスの山岳氷河とは異り山頂を覆う平坦な大陸氷河となる。沿線の周氷河地形を見つゝU字谷を下り世界最大のソグネフィヨルドの湾奥に到着。ヴェルム氷期時の海面上昇でできたフィヨルドの狭い支流の船旅、垂直な崖からは滝が一気に落下する。61°Nという高緯度の初経験、外気温7°C肌寒い。オランダへの機上からも大陸氷のフォルゲ氷河をみる。氷河を満喫する旅であった。

ヨーロッパでみた農牧業

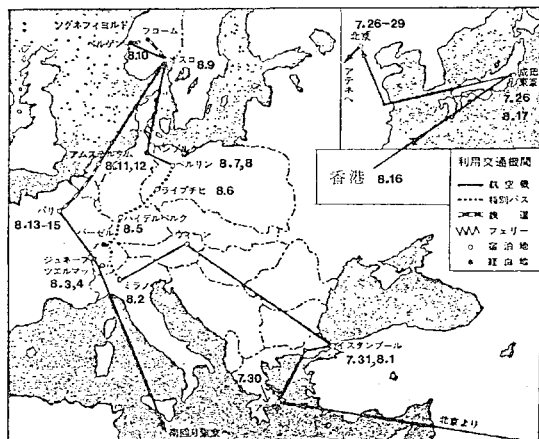
スイスのバリス山村では石と木造を組み合わせたゴタルト式農家の並ぶ本村から中腹のマイエンザス、アルプへと三段式経営の移牧なのに対し、

低山性のシュバルツバルトでは庇の大きい曲がり屋風の孤立荘宅が点在し、牧草や麦類を栽培し肉牛を放牧している。続くライン地溝帯は恵まれた日照を利用し、平坦なフランスとは異った斜面利用のぶどう畑が広がり甘味の少ないドイツの白ワインの主産地である。西独東部から東独への構造平野では小麦、燕麦、ビート、馬鈴薯等の大区画の畑が広がりサイロをもつ農家が散見、混合農業地帯が広がる。同じ混合農業でも東独に入ると集団農場の経営で畑の区画は更に大きく、農業機械での作業風景が見られたが肥料に自然の人糞をスプリンクラーで与えていた。畜産・農業部門からなる平均的集団農場（豚5千、牛2千、耕地5千ha）を訪問したが、生活には満足し有利な公道定価格の為自由市場のない点が他の社会主義国に比べ興味深かった。オランダではアムステルダム北部の園芸地域と世界1のアールスマ生花中央市場を見学、その規模の大きさにオランダの園芸農業の地位を感じる。反面、ゾイデル海締切り大堤防見学の途上、ポルダーは殆んど牧場で、草をは

む乳牛の多さに、農家は安易に政府に保障される酪農を求め、その結果が“バター”の山、牛乳の海”といったECの問題を喚起していくのだと痛感する。

本稿は、1982年1月23日、お茶の水地理談話会での発表要旨である。

（8回生 東京女学館高校）



ヨーロッパの旅から—ボルドー—

武田 む つ み

1981年7月から8月にかけて、28日間のヨーロッパ旅行の機会に恵まれた。主人の国際会議への同行という形の為、コースの選択に多少制約があったが、ヨーロッパ内はすべて列車で移動（夜行を含む）し、もっぱら自分の足で歩き、現地の人々と接することができた。地理学的な旅とはいえなかったが、団体旅行にない私たちなりの旅の楽しさを充分味わうことができたと思う。宿泊地はパリ→ボルドー→アルル→ナポリ・ローマ→ピサ・フィレンツェ→ローザンヌ・ルツェルン・ベルン→カールスルーエ・フランクフルトだったが、今回は観光旅行では訪れる機会が少ないと思われるボルドー周辺を中心に少し報告させていただいた。

パリのオーステルリッツ駅から特急列車に乗りこむと4日間歩き回ったパリの街はあつという間

にすぎ、広々とした田園風景が続く。麦畑、飼料畑、ひまわり畑等々、視界に山の姿はなく、やはりヨーロッパは大陸だどつくづく感じさせられる。ツールでロワール川を過ぎるといよいよ南フランス。ボワチエを通り、約4時間後、ガロンヌ川の鉄橋を渡りボルドー駅へ到着。郊外のボルドー大学へ落ち着いた。市街は18世紀風の建築が並び、ガロンヌ川に臨む一角はローマ時代からの旧市街になっている。

ボルドーは南はピレネー山脈、東は中央高地に囲まれたアキテーヌ盆地の中心都市である。この盆地は地中海と通じていたビスケー湾の南東端が第三紀の経過と共に陸化してできた低地帯で、ジロンド・ガロンヌ川流域からその右岸は石灰岩の丘陵地帯で東へむかって高度を増している。一方、左岸はピレネーより供給された物質からなる複合